

ハワイ・アイアンマン 2009 トライアスロン世界大会

北名古屋市 桑原 邦匡

私としては、設定していた順位やタイムに遠く及ばなかったので、残念な結果としか申し上げられませんが、21年間このトライアスロン競技を続けてきて、こんなに喘ぎ、苦しんだ結果、乗り越えられたレースは一度としてありませんでした。そういう意味では、目的であった「力を出し切る」ことが達成できて、感謝と誇りを胸に帰国しました。大会中の出来事を綴り御礼に替えさせていただきます。ありがとうございました。

.....

結果報告

大会日 2009年10月10日(土)
会場 米国ハワイ州ハワイ島カイルア・コナ
距離 スイム...3.8km、バイク...180.2km、ラン...42.2km
参加者 約1,800名

10月10日(土)、満月に一番近い土曜日、ビッグアイランド・ハワイでは、トライスロン世界最高峰と称される「ハワイ・アイアンマン 2009」が開催され、世界25カ国の予選レースでクオリファイ(年代別上位3%)を勝ち取った猛者が一堂に会し、発祥の地ハワイ島で世界一を競うのである。レースを迎えるまでの1週間は、アイアンマン・ウィークと呼ばれ、普段は穏やかなコナの街がアスリートをはじめ、家族、友人、スタッフやボランティアでごった返し、パレードやパーティが連日催され、盛り上がりのボルテージも日に日にアイアンマン一色になる。

いよいよレース当日、スタート会場へ。小林ゴムに作製していただいたスイムスーツの浮力の恩恵に感謝しながら200メートル先のスタート地点までアップしながら泳いでいく。スーツは、地上で着用していると少し窮屈感があったが、水中に入ってみると違和感は全くなかった。いつものように右よりの前方に位置し、7時のスタートを待つ。

スイム(1:07:10)

興奮した選手が右往左往しながら互いの息を感じるぐらいの至近距離の中、キャノン砲の合図とともに1,800名が一斉にスタート。スタートは、水中プロレスでもしているように我先へとバトルが続く。外国選手の腕はまるで丸太棒のような衝撃でゴーグルがずれたり蹴られたりして弱気になる。約2キロ先のボートを目指して必死で泳いでいく。折り返してからは、はるか彼方のゴールの棧橋を目指してペースを上げる。電光掲示があり約1時間7分。ボランティアからバイクバックを受け取り着替えテントへ。バイクシューズを手にバイクまで走る。ヘルメットとサングラスをかけ、ラックからバイクを取り出し、バイクに飛び乗る。

バイク(6:28:01)

バイクコースは、15キロ先のケアハウを折り返し、一旦、スタート地点を通過し、70キロ先のハーヴィーまでクィーン K ハイウエーの溶岩台地をひた走る。これが単調で、大きなうねりを伴ったアスファルトの道を灼熱の太陽に体力を奪われぬよう我慢しながらペダルに魂を籠める。平均速度は前半37.5キロ/h。シマノの電動式コントロールレバー仕様のジャイアントTTマシンは、カミハギサイクルのスペシャル・メンテナンスでダンシングしながらも変則ができるなど、まさにワープロからパソコンに替えたような感動があった。ハーヴィーを折り返し90キロ過ぎたあたりから、向かい風が強くなってきた。これが結局バイクゴールまで続く。今年はそれほど強烈ではないが、みな顔をしかめながら必死の形相で自然の悪戯に負けないようにしている。私も例外ではなく、暑さと強風で次第に体力が消耗していくのが自覚できた。あろうことか、吐き気をもよおし、順調に進めてきたバイクも急ブレーキがかかる。胃の中のを全て吐き出し、その後は水しか内臓が受け付けてくれない。いつもなら暫く我慢すれば回復し持ち直せるのだが、今回は全く兆しが見えなかった。昼頃になり空腹感を感じながらも食べ物を想像するだけで胃液を垂らし続けることになった。手先も痺れはじめ、血糖値も下がっているため眠気もありフラフラしていたのだろうか、メディカル・カー(救護車両)にストップを命じられる。車内で診察を受けた結果、スタッフからDNF(辞退)ポーズ。相手はどうも辞めさせたいらしいが、片言の英語で継続を訴える。必死の訴えを受け容れてくれたようで、車内で点滴で栄養物を強制的に注入させること30分。そして、再スタート。何百人にも抜かれた分、ペダルに力が入った。しかし、衰弱した身体の回復には遠く及ばなかった。点滴後15分、再度もどし始め、2時間近く嗚咽が続く中、最後の力を振り絞ってバイクゴールを目指す。ゴール地点でバイクをボランティアに渡し、ランバックを受け取り着替えテントへ。

ラン(5:58:49)

私の構想はこうだった。スイムを1時間で上陸し、バイクは5時間30分でまとめ、ランは3時間15分で粘りに粘って、ハワイの自己ベスト9時間45分を叩き出し総合100位以内というプラン。バイク終了時点で、またもテント内で止められる。脈拍を測定され、またもリタイヤを勧められるが、ランに送り出してくれた。コースに出るといきなり急な上り坂が待ちっており、心拍を上げる度に嗚咽を繰り返し立ち止まった。他の選手は1.6キロおきにあるエイドステーションで栄養を摂取し体力を温存させる。しかし、その日の私は特別で、食べ物の臭気だけで吐き気をもよおしていた。水で口をゆすぎ、その場を早々に立ち去ることに徹していた。上りは早足に歩く。下りは7分ジョグで吐き気を招かないよう心拍数に注意を払う。毎日、1キロ4分30秒ペースで練習してきただけに、アスリートの悲しい性か、ここまでボロボロになりながら時間短縮することだけを考えていた。ランの折り返し地点では、2本目の点滴をプレゼントしてもらい、またしても30分。街路灯のないハワイ大会は、夜道のランナーをゴールまで導くために「満月に最も近い土曜日」に開催される。私は、その粋な恩恵に預かりながら歩を進めた。抜くことはほとんどないけど、同じようにボロ雑巾みたいな選手は何人かいた。暗くて顔は見えないが、みな前だけを見て黙々と進むことだけを目指していた。私もレースのような修行のようなこの特別の時間を他の選手と互いの尻を叩きあいながら、自分を鼓舞し、灯りの集まるコナの街を必死に目指した。ランの42.195キロのうち2.195キロは街のメインストリートで2万人の大歓声の中をどの選手もガッツポーズでゴールを向かえる。しかし、その日の私は違って、メディカルスタッフ2名にゴール1キロ手前ぐらいから付き添われ、ゴールした瞬間を今もはっきりと覚えていない。応援に来ていた家内や先着した友人たちの話によると「生まれたての小鹿みたいに四つん這いだったよ」って。ゴールの花道がまぶしいぐらいに光り輝いていたのは憶えている。今、自分がそこに向かっていることもなんとなく。勿論、このようなゴールをイメージして1年間がんばってきた訳ではないけど、自然と対峙し自分と向き合い一瞬たりとて「もう駄目だ」と思わなかったこと、他人に勝つということより、このタフなコースでどんな最悪の状態であろうと力を出し切れたことを誇らしく感じています。そして、私を支えて続けてくれた全ての方に感謝しながら、長い長い一日をようやく終えることができました。

マハロ

トータル 13 : 46 : 08

総合 1403位